

明治の「青春」

——語の活性化と分化——

玉 村 文 郎

① はじめに

「青春」とは傲慢なものであるけれど、危ういかなチヤホヤのドラフト、就職内定の若者たち。」（一九九〇年一月二七日朝日新聞夕刊「素粒子」）

右の例にも見られるように、現代は、ある意味で「青春」という語が頻繁に使われる時代と見ることができかもしれない。単に「青春」と題するものだけでも、伊藤整、内村直也、大岡昇平、岡田三郎、小栗風葉、邦枝完二等の作物があり、他に「青春怪談」「青春行状記」「青春群像」「青春行楽記」「青春行路」「青春と頽廢」「青春と泥濘」「青春年鑑」「青春の息の痕」「青春の歌」「青春の逆説」「青春之詩」「青春の自画像」（佐藤春夫・前田河広一郎）「青春ひととき」「青春不在」「青春舞台」「青春物語」「青春論」などがある。

明治の「青春」

って、たいへんにぎやかである。この他にも「息子の青春」「明治の青春」なども挙げられ、推理小説や映画・歌謡の題名にも、「青春」の語を用いたものが少なくない。

このような、いわば題名の中の「青春」の語の嚆矢は、一九〇五（明治三八）年の小栗風葉の『青春』である。小論は、このような「青春」という語の弘通にまつわる調査とそれにもとづく考察の一端である。

① 現行辞書の中の「青春」

ここで、現在一般に用いられている国語辞書で「青春」という語を引いてみよう。

1 わかい時代。元気でわかさにあふれる時期。【用例】青春は二度とかえらない。／わが青春に悔（く）いなし。（【用例学習】

語辞典』一九七〇年学研)

2 青春時代。▼人生の春にたとえられる若(わか)い、元氣な希望にあふれる時期。(光村国語学習辞典』一九八三年 光村教育図書)

右のような小中学生用の辞書では、「青春」について、「人生の一期」としての語義説明を施すだけである。この点に関しては『例解国語辞典』『新明解国語辞典』『現代国語例解辞典』などの一般成人用国語辞書も同断で、いずれも一義を説くのみである。また、対訳辞書の方に目を転じて、「新和英大辞典」(一九七四年 研究社 第四版)をはじめとして、“the springtime [springtide] of life; the bloom [heyday] of youth; youth”のように、英語の“youth”に相当する語を挙げるものがほとんどであって、前記の学習用辞書と同様である。一般成人用国語辞書の中には、複数の語義を挙げるものがある。その場合の一義は、すでに紹介した「青年時代」であるが、別義として

春。「時はこれ——、日まさに暮れなむとす」▽五行説で「春」は春を表す色。(岩波国語辞典』一九六三年 岩波書店)

を挙げるものがある。『広辞苑』や『新潮国語辞典—現代語・古語—』は、「春」の義を第一に、「青年時代」の義を第二に掲げるものであるが、これらはおおむね歴史主義の立場に立って編集された辞

書である。小学館の『日本国語大辞典』やそれを基礎にして成った『国語大辞典』は、前記二義のほかに

(年ごとに春がめぐるところから)年を重ねること。歳月。また、年齢。*読・英草紙—三「青春十年を折(くじ)く」

を挙げている。『広漢和辞典』『漢語林』『角川漢和中辞典』などの漢和辞典は、①春、②青年、青年時代の二義を挙げている。

以上の諸辞書を概観して言えることは、現代では「青春」の語義がほぼ「人生の青年期」に限定されるようになったという事実である。

② 近世末期までの「青春」

漢語「青春」の古い用例は一五四八(天文一七)年ごろに成った『運歩色葉集』(静嘉堂文庫蔵本)の収載語としての「青春・青陽」とされている(『広辞苑』『日本国語大辞典』)。これは一五七一(元龜二)年の京大本『運歩色葉集』では青春・青陽セイユウの如く、片仮名のルビが振られている。しかし、一二〇〇年ごろに成ったと考えられている『伊呂波字類抄』に

青天アヲ、黛アヲ、雲クモ(中略)、陽春ヤウシュン、春

の記載があり、辞書の収載語としては、この方がはるかに古い。十卷本伊呂波に掲載されているということは、すでにこの語の使用が

Spring, n. Haru; shun (以下略)

とあるのみである。ちなみに初版になく後に増補された第三版によって更に一項を追加しても

ADOLESCENCE, n. Jaku-nen, itokenai toki, shō-nen.

とあるのみで、期待された「青春」を見出すことはできない。一八二四(文化一)年に成った『暗厄利亜語林大成』や一八六六(慶応二)年に出された『江戸再版 薩摩辞書』を見ても、「青春」なる訳語を見つけることはできない。

辞書の中で「青春」を記載したものは、明治初期・中期のものではなく、末期のものになってようやくその登載が見られる。一九〇九(明治四二)年刊の『日本類語大辞典』の「させつ」[季節]の項下にある「はる」[春]の第八語が「青春」である。この辞書は名の如く類語を広く集めたもので、一般の辞書のような語釈は施していないが、分類の項目から見て、この「青春」が「春季」を意味するものであることは明白である。類語約二十万項目を載せた本書であればこそ「青春」が記載されえたのであろう。

ところで「青年時代」を意味する「青春」の用例はどうであろうか。一九二二(明治四五)年初版刊行の『新独和大辞典』(登張信一郎著 大倉書店)の「Frühling」の項に

～des Lebens 少壮, 青春: auf den ~ bezüglich 春の, 青春の.

という記載が見え、また「Jugend」の項に

in der Fülle der Jugendzeit 青春時代に

が見え、さらに「Lebens =」の項に

Lebens = frühling m 青春

が見える。このような訳語「青春」の例が、第二例を除いて、「青年時代」を意味していることは原語から見て議論の余地のないところである。

一九一五(大正四)年初版の『井英和大辞典』(至誠堂刊)の「Adolescent」(Adolescenceの子見出し)に「青春の」の訳語がある。同年刊の『で引く国語辞典』(上田万年著 富山房)には

Seishun 青春 [名] 1. はる. 青春; 陽春; 芳春. 2. としご

ち. 年わかの盛.

とあって、現代の『広辞苑』と語義の区分も記述順も一致する。

④ 明治以降の文学作品における「青春」

夏目漱石は「青春」なる語を次のように用いている。

①この無鉄砲な希望には、さすが青春の気に満ちて、大いに同情を寄すべき雪江さんも一寸毒を抜かれた体であったが(『吾輩は猫である』)

②彼は三十分したら

青春 二三月。愁随芳草長。閑花落空庭。素琴橫虛堂。蠨蛸掛不
動。篆煙繞竹梁。

と云ふ六句丈出來た。〔草枕〕

③心臓の扉を黄金の鍵に敲いて、青春の盃に恋の血潮を盛る。

〔虞美人草〕

④三四郎は切実に生死の問題を考へた事のない男である。考へる
には、青春の血が、あまりに暖か過ぎる。〔三四郎〕

⑤その上世間の小説に出て来る青春時代の修辭には、多くの興味
を持っていなかった。〔それから〕

⑥その日はこの間とは打つて變つて、青春の第一日ともいふべき
暖かい光を、南へ廻つた太陽が自分達の上へ投げかけていた。

〔行人〕

右の六例のうち、②は漢詩の中の用例で、「春季」の意である。

⑥は「春季」と「青年時代」の両義を蔵しているとも解せるが、前
後の文脈を考えるならば前者の義に限定されるであろう。他の四例
はすべて、現代一般に言うところの「青春」即ち「青年時代」の義
である。『吾輩は猫である』の発表は、小栗風葉の『青春』のそれ
と時期が重なるのが、偶然の符合かどうか調査すべき事項である。

明治の文学者の使用例で、『青春』以前のもは、目下の管見の範
圍では高山樗牛の

⑦あだに過ごせし幾とせの、
偽多くつみ深きと想ひて、

ここに青春の移ろひやすく、

勝事のとこしへならざるを嘆きそめにき。

〔わがそでの記〕

⑧道学先生の見地よりすれば、恋愛の如きは青春の迷ひに過ぎざ
らん、然れども是の如き迷ひは醒めたるものにとりて永遠の悔
恨に非ざるべき乎。〔美的生活を論ず〕

の二例である。

文学作品の用語索引によつても、森鷗外や志賀直哉などには「青
春」の使用がないことがわかる。その点、漱石は注目すべき作家で
あつたと言えるかもしれない。

⑤ 語彙体系から見た「青春」

漢語「青春」はもともと五行説に発した語で、「朱夏」「白秋」
「玄冬」とともに、四季を構成するものであつた。すべて「色彩語
十季節名」という結合になる二字熟語で、四者がセットになつてい
たわけである。しかし、古辞書類にもそろつて四語を掲出するもの
は極端に少なく、記載に跛行現象が見られる。近世の『和漢三才図
会』のような詳しい記載の中にも「白秋」が見られなかつたりする

のである。ことを「青春」に限って述べよう。「春」を表す二字漢語としては、「青陽」がよく用いられてきた。「青春」は長らく第二位以下の地位にあつた。中古から近世末期まで「青春」の命脈はあつたかも知れぬ。地下水の如く地表に現れないかたちで続いてきたかに見えるのである。しかし、「青春」は決して枯死することはなかった。明治になって「青春」は「青陽」を越えるようになり、あらたな活性を帯びるようになったのである。その活性化には、漢語「青春」が本来内在させていた語義上・文字上の理由とともに、明治という時代がもつた外的なインパクトを考えなければならぬだろう。

内在的理由の第一は、「青春」がすでに古代中国において、

①春 ②若い時代、青年

の二義を有していたことである。「青陽」には右の②の義はない。かくて、「青春」はわが国においても①の義のみならず、自然に②の義としても用いられるべき命運を有していたわけである。本邦の漢詩文の中に稀に②の義の用例を見出すのは、言わば自然の理にかならない。例えば、『日本国語大辞典』の挙げる徂徠集―梅花落「纔憐同白髮、已愧異青春」などである。内在的理由の第二として文字のことがある。「青春」の②の義として漢和辞典の記すところは、「年の若いこと。若い時代。また、青年。若者。」であるが、これらは年代であるのか、人間であるのか、限定することが困難であ

る。属性なのか、その具有者なのか確定できない。かかる状況は、英和、独和などの辞書の訳語相互の間にも看取されたことである。漢語「青春」が②の義のうち「青年・若者」の意で用いられたと想定すると、「青」という漢字を共有するだけに、①の義の単なる

「春」ではなく、人生の春を示す②の義としての使用への傾斜が促進されたことが、動機として考えられる。そこにはまた、「季節としての春」とは異なる「人生の春」を限定して表すための分化の意識が作用したはずである。かくて、漢語「青春」はおおよそ

a ①および② (中国で)

b ①中心 (日本中近世)

c ①および② (明治前期)

d ②中心 (明治後期)

e ②のみ (大正以後)

のような段階を経て今日に至つたと考えられる。

最後に、外的なインパクトとして考えるべき事項がある。それは明治という時代が開国後、急速な近代化を目指した時期であり、科学・技術・産業の面だけでなく、文芸・思想の面においても、積極的に西欧のものを摂取・吸収した時代であつたという事実である。

“youth”, “adulthood”, “young” 等々の訳語として、とりわけ浪漫主義思潮における「青年時代」「思春期」を表す訳語として

「青春」が恰好の位置を占めて行ったことが考えられるのである。樽牛の使用にその経緯の一切がうかがえないだろうか。

いずれにしても、漢語「青春」は、本来の語彙体系から突出して、現代では独自の座を占めるようになった。それはしかし、すでに古代中国の語義が示す如く、もともと「春」が自身内包しているところの、あるいは比喩として転化させやすい「人生の春」への分出を、自らの歴史の中で確定的にしたに過ぎないのかもしれない。

⑥ おわりに

以上は、わが国の近代的辞書の嚆矢と目されるJ・C・ヘボンの『和英語林集成』、大槻文彦の『言海』に「青春」なる語が見られないうちに端を発した小さな探求のまとめである。語の変容が、語形に、語義に、時にはその両面に見られるのであるが、「青春」は語義と語彙体系の面で問題になる語であった。明治という語彙の変動の激しかった時期に、個々の語がどういう動機、いかなる理由によって変わるのか（あるいは変わらないのか）、どういう面に変容が生じやすいのかなどについて、語彙・語史の研究の一端として考察してみた。調査すべき資料としては、文学作品のごく一部しか扱わず、こと明治に限っても、新聞・雑誌を対象としなかった。それらについては後考を期したいと思う。

注

- ① 国立国語研究所報告12『総合雑誌の用語 前編』一九五七、同報告13『同前 後編』一九五八、同報告21『現代雑誌九十種の用語用字(1)』一九六二、同報告25『同前(3)』一九六四、同報告37『電子計算機による新聞の語彙調査』一九七〇（いずれも秀英出版）等によると、「青春」の使用率は0.052%、0.094%であり、新聞用語での順位は二、八九〇位である。
- ② 項目の前の+印は、書きことば・廢語に付せられるもの。
- ③ 『広漢和辞典』大修館書店。